

27	豊能町立東ときわ台小学校	H28～R1
----	--------------	--------

令和元年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

「小学校における障害のある児童のための障害の特性に応じた教育内容、指導方法および評価の在り方についての研究開発」

2 研究の概要（別紙1：研究の概要図）

小学校の通常の学級に在籍する児童（通級による指導対象者を除く）のうち、発達障害等のある児童を含めて、学習上の困難さを有する児童（以下、「研究対象児童」）に対する特別の教育課程の在り方に関する研究を行う。

研究対象児童について、教科等での学習における特別の教育課程を設定することにより、学習面・行動面の変容等、通常の学級における特別な教育課程の編成の成果が見出され、小学校における、より一層適切で連続的な教育課程の在り方が明らかになると考える。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究の目的

以下のような教育課程を設定することで、学習上の困難さを有する児童に対する効果を検証する。

- ・特別活動において、社会性や全ての教科学習に共通する基盤となる力を育む活動を行いつつ、特別な内容を付加した『特別の時間「のびのび」』を設定する。『特別の時間「のびのび」』においては、研究対象児童に対して、それぞれの課題に応じた個別の指導計画を作成し、自立活動の内容の指導を付加する。
- ・研究対象児童に対して、国語科での学習において、指導上特別な配慮や指導目標・指導内容の一部変更、自立活動の内容を付加した個別の単元指導計画を作成し、指導する。

（2）研究仮説

以下の手順で研究を進めることにより、より適切で連続的な教育課程の在り方が明らかになると考える。

- ①通常の学級に在籍する児童（通級による指導対象者を除く）のうち、発達障害等のある児童を含めて、学習上の困難さを有する児童について、実態把握をした上で、その学習特性や障害の状態等について専門的見地からの助言を踏まえながら研究対象児童の状態を正確に把握する。
- ②研究対象児童について、それぞれの実態把握に基づいた個別の指導シートを作成する。また、個別の指導シートに基づいて、個別の単元指導計画を作成する。なお、個別の単元指導計画は、指導目標・指導内容の一部変更・付加する部分を記載する。
- ③授業において、②で述べた個別の単元指導計画を踏まえた指導を行う。

- ④授業後、個別の単元指導計画における指導目標の到達の程度、指導内容の習得の程度、その妥当性について記録する。
- ⑤記録を集約し、専門的見地からの分析を行い、研究対象児童に対して設定された特別な指導目標及び、指導内容の特定、その成果や妥当性、効果的な指導方法について検証する。
- ⑥⑤の検証を踏まえ、研究対象児童について、効果的な指導方法、教育課程の編成方法に係る知見をまとめる。

(3) 教育課程の特例

小学校の通常の学級に在籍する児童を対象として、下記の特別な教育課程を編成実施する。

- ・特別活動においては、そのねらいに向けて社会性や全ての教科学習に共通する基盤となる力の育成を図ることと、特別な指導内容に関する活動を行う『特別の時間「のびのび」』を設定する。研究対象児童に対しては、新たに設定された時間において、自立活動の内容を取り入れ、それぞれの課題に応じた個別の指導計画を作成する。
 - *『特別の時間「のびのび」』については、次の時数を特別活動に付加し実施する。
 - 1・2年生12時間、3・4年生15時間、5・6年生3時間
 - *『特別の時間「のびのび」』については、児童の実態把握による課題をもとに「身体感覚を中心とした活動」「ことばのやりとりを中心とした活動」「記憶や情報伝達を中心とした活動」の3つの活動を設定する。
- ・研究対象児童に対しては、国語科での学習において、指導上特別な配慮や指導目標・指導内容の一部変更および自立活動の内容を付加した個別の単元指導計画を作成し、実施する。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

研究対象児童として、①主に学習に困難さが見られる児童②主に対人面に課題が見られる児童③主に愛着、心理面に課題があると見られる児童④主に行動面（多動や不注意傾向）に課題があると見られる児童を各学年2～3名程度抽出し、自立活動の内容の付加を実施した。

- ・『特別の時間「のびのび」』について
 - 1・2年生12時間、3・4年生15時間、5・6年生3時間を特別活動に付加し、実施する。また、「身体感覚を中心とした活動」「ことばのやりとりを中心とした活動」「記憶や情報伝達を中心とした活動」の3つの活動を設定する。研究対象児童に対しては、自立活動の内容を付加して指導する。
- 実施方法は、通級指導教室在籍児童、特別支援学級在籍児童を含んだ全体のバランスを考えて、各学年を①～③の3グループに分けた。きょうだい学年の2年－4年、3年－5年、1年－6年、さらに隣接学年の1・2年、3・4年という異学年合同の授業を設定し、同じ番号のグループごとに3活動の「のびのび」をローテーションで行った。また、『特別の時間「のびのび」』での取組みの広がりや深化、児童への負荷を低減させ、取組みの効果が大きくなることをねらい、『特別の時間「のびのび」』と教科等の指導や学校生活目標を関連させた年間の

指導計画を立案した。1～4年生に関しては、一定の間隔をあけて取り組むことで、学校生活目標と関係づけたり、児童の実態を把握した上で、指導の手だてを改善したりしながら実施できるようにした。また、『特別の時間「のびのび」』での視点を国語科だけでなく、各教科等、及び学校教育活動全体で、生かすようにした。

・国語科での取組みについて

研究対象児童に対して指導上特別な配慮や指導目標・指導内容の一部変更および自立活動の内容を付加した個別の単元指導計画を作成し、実施する。

・評価方法について

『特別の時間「のびのび」』、国語科共に、研究開発支援員等による、授業観察を行い、研究対象児童に対して講じた手だての有効性と児童の授業での様相について記録した。なお、国語科については、授業毎の記録から、単元ごとに、児童の実態と手だての検証・評価を行っていった。その記録や、学校生活全般での様子の記録等を合わせて、定期的にPDCA会議（年6回）を行い、個別の指導シートの内容の改訂、自立活動の内容に対する手だての検討を行い、実態把握と手だて及びその効果の検証を行った。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	研究の土台づくり <ul style="list-style-type: none"> ・ 専門家を招聘した研修の実施 ・ 校内研究授業の実施 ・ 先進校視察等 ・ 「研究対象児童」に対する個別の見立ての実施 ・ 集団の見立ての実施
第2年次	特別な教育課程の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ チェックリストを活用した個々の児童の実態把握 ・ どの子も安心して過ごすことのできる基礎的環境整備 ・ どの子もわかる授業づくり（国語科の学習を中心として） ・ 「特別の時間」中学年での実施 ・ 国語科において研究対象児童に自立活動の視点を取り入れた授業を実施
第3年次	特別な教育課程の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ 実態把握の年間計画の作成 ・ 「個別の指導シート」の作成 ・ 定期的な個別の指導シートの見直し（PDCA会議）の実施 ・ 基礎的環境整備の推進 ・ 学習室チェックリスト作成 ・ 「特別の時間」の全学年実施、 ・ 自立活動の内容を付加した「特別の時間」の実施 ・ 国語科において、自立活動の内容を付加した授業計画づくり ・ 「特別の時間」・国語科の指導案形式の改訂 ・ 研究成果の公表（豊能町実践交流会開催 対象：豊能町立学校園所職員）

第4年次	<p>特別な教育課程の実施</p> <p>前期：特別の教育課程の編成・実施、実施方法等の整理、学力面・行動面における変容の記録・整理、環境整備、「だれもがわかる授業」づくりの研究</p> <p>「特別の時間」の適時性・系統性・発展性を見直し、他教科等との関連を図った年間計画の作成、研究対象児童に対する授業場面での評価方法の検討</p> <p>中期以降：特別な教育課程の編成・実施及び研究対象児童の変容との関連を総合的に分析・検討、連続性を意図した特別の教育課程の効果及び課題を整理、研究の成果物の検討、研究成果の公表</p>
------	---

(3) 評価に関する取組

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・国語科まとめテストの実施【7月・12月・2月】 全学年 ・学校評価アンケートの実施【12月】 全学年 ・自己評価書作成【12月】 ・チェックリストによる個別の実態・学級実態交流【2月】 全学年
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・事前調査(個別の実態・学級実態等)【5月】 全学年 ・保護者授業アンケートの実施【5月・9月・10月・2月】 全学年 ・社会性測定用尺度アンケートの実施【7月・12月・3月】 全学年 ・実地調査における中間報告【10月】 ・実態調査(個別の実態・学級実態等)【10月】 全学年 ・学校生活アンケート(児童)の実施【6月・11月】 全学年 ・学校評価アンケート(保護者)の実施【11月】 全学年 ・教職員向けアンケートの実施【11月】 ・国語科まとめテストの実施【7月・12月・2月】 全学年 ・個別の記録による(学習面・行動面の変容の記録)評価【12月・2月】 全学年 ・自己評価書作成【12月】 ・チェックリストによる個別の実態・学級実態交流【2月】 全学年
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・事前調査【5月】 実態調査【10月】 全学年 ・保護者授業アンケートの実施【5月・9月・10月・2月】 全学年 ・社会性測定用尺度アンケートの実施【7月・12月・3月】 全学年 ・学校生活アンケート(児童)の実施【6月・11月】 全学年 ・学校評価アンケート(保護者)の実施【11月】 全学年 ・教職員向けアンケートの実施【11月】 ・国語科まとめテストの実施【7月・12月・2月】 全学年 ・個別の指導シートによる(学習面・行動面の変容の記録)評価(PDCA会議)【10月・1月・2月】 全学年 ・自己評価書作成【12月】 ・豊能地区内研究発表会実施アンケート【11月】 ・チェックリストによる個別の実態・学級実態交流【2月】 全学年

第4年次	<ul style="list-style-type: none"> ・事前調査【4、5月】実態調査【10月】全学年 ・保護者授業アンケートの実施【5月・9月・10月・2月】全学年 ・社会性測定用尺度アンケートの実施【7月・12月・3月】全学年 ・学校生活アンケート（児童）の実施【6月・11月】全学年 ・学校評価アンケート（保護者）の実施【11月】全学年 ・教職員向けアンケートの実施【11月】 ・国語科まとめテストの実施【7月・12月・2月】全学年 ・個別の指導シートの見直し、学習面・行動面の変容の記録および評価（PDCA会議）【5月・6月・9月・10月・1月・2月】全学年 ・研究発表会【11月】 ・最終報告書作成【3月】
------	---

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

1 児童・生徒への効果

① 特別活動『特別の時間「のびのび」』の取組みから見えてきたこと

授業記録等から児童の姿を捉えると、異学年で交流し、互いによさを認め合いながら、学習の基盤となる活動を楽しんで取り組んでいる様子が伺える。（『特別の時間「のびのび」』において異学年との活動を設定し、活動の中で、自分のよさや友達のよさを見つめることを行ってきた成果については後述の社会性測定用尺度についての結果を参照されたい。）今年度は、学校生活目標とリンクさせながら取り組むことで、児童の学校生活目標への意識の高まりと、『特別の時間「のびのび」』の時間でのねらいへの意識の明確化が図られた。これらのことは、児童のみならず、教職員への効果も高く、具体的に生活目標を意識して児童と学校生活を過ごし、その中で「のびのび」を実施し、「のびのび」での活動やそこから得られた知見を、学校教育活動全体のなかで、児童にフィードバックしていくという行うべきことが明確になった。このことは「のびのび」での学習が、その時間にとどまらず、児童に生かされていくということであると考える。

② 国語科実態テストから見えてきたこと

学校が作成し、例年実施している国語科の実態テストにおいて、特に読解面での向上がみられる。【平均点 90.64(H28年度)→90.11(H29年度)→92.62(H30年度)】
向上の要因としては、以下のことが考えられる。

- ・国語科の授業づくりに関する研修や授業研究会を重ねることによって、教員の授業改善のみならず、児童の困難さに寄り添った手だてを具体的に考えることが教職員全体で共有され、授業づくりのベースになることが確認されたこと。
- ・授業環境及び授業づくりにおける教師のチェックポイントをまとめた「東ときわ台小学校授業づくりのためのプロジェクト」が浸透してきたこと。
- ・授業での、児童の困難さに応じた手だての具体化が図られてきたこと。

③ 生活アンケートから見えてきたこと

アンケートの記述の中で、多くの児童は「学校で友達と勉強したり遊んだりすることが楽しい」、「自分で頑張れたことがある」等、学校の楽しさや自分が感

じた喜びや達成感を記述している。学習や「のびのび」、行事などの多様な学びの場で、楽しみながら粘り強く、前向きに取り組む様子が伺える。また、『学習で分かりにくかったところが少しずつ分かるようになってきたか』という問いに対しては、ほとんどの児童が肯定的な回答をしていた。具体的には、「授業がおもしろく、楽しく、覚えやすい」「みんなが発表してくれてわかりやすくなった」「先生がやさしく教えてくれた」「授業がわかりやすくなってきた」などの意見も出ていた。UDの視点に基づいた授業づくりや、自立活動の内容を取り入れた指導が、児童の理解の一助となっているように思われる。これらと関連して、『自分にはよいところがある』という項目も肯定的な回答の割合は多かったが、より自信を深められるように丁寧に指導していきたい。

生徒指導・友達関係面についても、自己の不注意以外で物がなくなったり、いやな思いを受けていたりという回答はほとんど見られなかった。

④ 社会性測定用尺度から見えてきたこと

* 高学年

思春期の入り口に差し掛かる微妙な年頃であるが、自分に対する肯定感や、自分の良さを見つめる項目や、周りの人と仲良くしている、人の役に立っているといった項目が少し上昇している。これは、学年の宿泊行事や、学習活動の中で感じる達成感や、日々の縦割り活動や「のびのび」の時間、委員会活動やきょうだい学年などの異年齢集団における関わりを通しての有用感が反映されたように思われる。

* 中学年

「のびのび」の時間や縦割り活動、きょうだい学年、クラブ・委員会活動などで時には先輩として、時には高学年に教えてもらう側として、いろいろな友達と関わりながら活動ができた。一方で、他者を意識し、友達と自分を比較したり、周りの目を意識し始める姿も見られ、自分に対して「無理やし」「ダメやし」という呟きが聞こえたりすることもあった。例えば、4年生はどの項目もやや否定的であった。その中で、クラスの人に対して、『相手の気持ちを考えて行動する』の項目のみ、【4.09pt(H29.7)⇒4.18pt(H30.7)⇒4.25pt(R1.7)】と、少しずつ肯定的な意見の割合が増えていた。これは友達との関わりの中で相手を思いやっつてのプラス行動をとらえていると考えられるが、一方で、相手のことを考えすぎて消極的になるマイナス行動につながっている児童もいるように感じられる。

* 低学年

「のびのび」の時間と合わせて、自然観察や体験学習など、定期的に異年齢での活動や地域のゲストティーチャーを招いての学びの場を設けてきた。2年生は下学年の意見をまとめたり、一緒に自然観察やダンスに取り組んだりするなど、小さな先輩として関わる場面もあり、こうした経験の自信も反映されているのではないかと思われる。具体的な数値として、「相手の話を素直に聞くことができる」【4.63(H31.7)⇒4.88(R1.7)】、「相手のために我慢することができる」【4.83(H31.7)⇒4.96(R1.7)】からも伺えるように、相手との関わりを通して自分の行動を修正することが増えたことで得られた達成感もあるのではないかと思われる。

【研究対象児童にみられた成果】

自立活動の内容を付加した国語科の授業づくりや、自立活動の内容を付加した『特別の時間「のびのび」』に取り組むことによって、アンケートの結果から、研究対象児童が授業に意欲をもって、楽しく取り組む傾向がみられている。顕著に成果が見られたのは、「学習に困難さが見られる児童」と、「行動面に課題があると見られる児童」であった。授業中の観察による評価のみならず、日常のテストや国語科実態テストでも向上が見られた。これは、これらの児童に対する手だてが適切であったと考える一つの指標となるが、プラスにつながったと思われる具体的な内容を挙げてみたい。

「学習に困難さが見られる児童」については、活動の見通しが持てる授業・環境づくりや、ペアトークや小グループ活動といったヘルプが出しやすい活動形態と安心できるクラス集団づくり、スモールステップで取り組める学習内容の工夫などが、児童の安心や学習への意欲・自己に対する肯定感につながったのではないかと推測される。

「行動面に課題があると見られる児童」については、視覚刺激を減らした環境づくりや焦点化された学習内容、視覚支援やリスタートを取り入れた授業の工夫、落ち着いて活動に取り組める学習集団づくりは、集中を促す効果につながっているのではないかと推測される。また、協力ベースの楽しい活動を通して、周りの友達の言動やよさに着目することは、自己の言動への振り返りにつなげるきっかけとなった。また、友達からの相互評価を通じて、自己のよさやがんばりを再確認することにもつながっていたのではないかと推測される。

また、『特別の時間「のびのび」』における異年齢集団の活動も、「誰でも安心して取り組める楽しい内容に少しずつ負荷をかけていく」ものであることが、どの児童も気軽に挑戦し、最後まで楽しく取り組むことができることにつながっていたのではないかと推測される。その中で、色々な児童が豊かな発想や工夫を発揮したり、その活躍が別の児童のロールモデルになったりする姿も見られた。また、高学年にとっても下学年との関わり、楽しく力を合わせる中で、有用感を感じる場面もたくさんあったのではないかと推測される。

一方で、「愛着、心理面に課題があると見られる児童」「対人面に課題があると見られる児童」については、成果が見られた部分と成果が見られにくい部分があり、やや課題が残る結果となった。『特別の時間「のびのび」』や授業の中で、ある一定の成果や意欲・達成感は見せているのに「自己肯定感」が低かったり、知的に高く、学習や活動における成果は見られるものの、自分の思いや不安を上手く言語化・行動化できず、トラブルになったりする姿も見られた。集団における活動や人との関わりの体験の中で、児童の適切な自己理解と社会性及び対人スキルの向上につながる、長期的な視野での継続した個別の手だてと振り返りが必要であると考えられる。

2 教師への効果

① 「だれもがわかる授業づくり」

今まで以上に授業づくりの工夫改善が見られるようになった。視覚・聴覚・触覚等からアプローチできる補助資料の提供方法、授業の組立・展開や児童一人ひとりの課題に合った手だてについて校内研修会で意見を出し合ってきたことによる。また、日常的にお互いの授業観察を行い、その都度指摘されたことを改善し

ていくようになった。その結果、図や絵の併用やICTの積極的な活用に取り組む教員が増えた。

② 「どの子ども安心できる学校」

基礎的環境整備を、研究のベースの一つにおいて取り組んできた。「教室環境チェックリスト」を作成することで、落ち着いて生活できる環境、学習しやすい環境を再点検し、さまざまな改善を行った。また、学習室も「学習室チェックリスト」に基づいて再点検して整えた。こうして、それぞれの教室が学習しやすい状況になっていった。

また、校内の掲示板には、子どもたちの頑張りが見える作品や掲示委員会からの季節メッセージの他に、集団づくりやソーシャルスキル育成にもつながるようなメッセージコーナーを作成した。児童玄関のこのコーナーには、ポストが設置されており、テーマに合わせて児童たちが直接メッセージなどを入れられるようになっている。さらに、各階の廊下には、簡単なトレーニングのコーナーを設け、日常的に体の使い方を意識できるようにした。

こういった一つひとつの取組みを通して、子どもたちにとってどういう環境が望ましいか考えるようになり、また、子どもたちの日々の学校生活状況を丁寧に見るようになった。

③ 学年団会・部会・PDCA会議等の活用

単学級で各学年1名の担任で日々をまわしていかなければならない状況だからこそ、「チーム」で物事にあたるようになった。本研究においても、それぞれ担当のチーム会議が重要な役割を担った。

まず、低学年・中学年・高学年所属教員で構成された「学年団会」というチームで、日常の個や学級集団の状況を把握し、確認し合った。実践後にはPDCA会議で実践内容や手だてが適切であったかどうか検証を行った。PDCA会議は、基本的に低・中・高のそれぞれ学年団で行ったが、時に参加メンバーを拡大したり、SSWに参加してもらったりしながら、学級集団や対象児童の実態についてより深く分析を行った。多面的に子どもについて考察でき、より具体的な支援方法を考えることができるようになった。

また、『特別の時間「のびのび」』で扱う内容や手だてについては、校内研究組織の3部会（人権・生指部、行事健康部、授業研究部）でそれぞれ研究や相談をした後、全教員で授業展開を確認した。実践後は、各部会で振り返りを行い、次回の『特別の時間「のびのび」』で活かせるように工夫していった。

さまざまな形の「チーム」で対応していくことは、すなわち、複数の目で子どもたちを見取ることである。その中で、個々の困難さをより丁寧に把握することができるようになるとともに、教職員側も全児童に対して意識をもって接するようになった。さらに、日頃から、授業づくりや集団づくりについての会話が多くなり、自分の考えを整理したり新たな取組みを追加したりする機会が増えてきた。そういった場面から、意欲的によりよいものをつくろうという向上心が感じられる。

研究開発課題に取り組む中で、教職員へのアンケートを実施すると、「一人ひとりを大切にしたい授業づくりをしたい」「その場を凌ぐための手だてではなく、将来的に、子ども力となるような手だてを考えたい」「子どものつまずきの原因はなんだろうと考えるようになった」「困っている子が困っているということ

ができる場をつくることを大切にしたい」「子どもの困っていることに対して目的をもって具体的な手だてを講じ、少しずつ支援し、重ねていくことで必ず力になっていくのだと思った」等、特別支援教育の視点を取り入れることで、教職員の児童の捉え方や講じる手だての在り方に対する考え方に変化がみられた。

3 保護者等への効果

本校の研究については、初年度から学校だよりやHPで取組みの様子を伝えてきた。また、昨年度からはPTA総会でも授業の様子をスライドで紹介し、内容を報告している。その中で、特に『特別の時間「のびのび」』の内容に興味を持ってもらっていると感じた。それは、学校教育診断アンケート「特活（特別の時間）の授業は楽しいと言っている。」に88%が肯定的な回答をしていることからもうかがえる。

研究の中心は国語科と特別活動『のびのび』であるが、その研究を活かした工夫や手だては他の教科でも行っている。授業参観後の保護者アンケートには、「明るく楽しい雰囲気での授業だった。」「様々な視点で物事を考えさせられる授業だった。」「お互いの意見をしっかり聞き合っていた。」「子どもたちが一生懸命考えているのがよく分かった。」等、本校が大切にしている視点について理解されていると感じるコメントが多く寄せられている。

昨年度初めて、国語・特別活動『特別の時間「のびのび」』に関するアンケートをとったが、どちらも7割以上が肯定的な評価であった。しかし、「わかる授業づくり」「認め合い支え合う集団づくり」では、数値を落としている。結果を真摯に受け止め、今年度は、補助資料の提示や活動内容のさらなる工夫改善だけでなく、話し合い活動や自主活動の推進にも努めている。本年度4月の全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「話し合い活動」について全国や大阪府と比べて肯定的な意見の数値が大変高い。日常の取組みが子どもたちにも浸透しつつあるように思う。保護者へは、学校の取組みについてさらに発信していきたいと考えている。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- ・『特別の時間「のびのび」』については、教科との関連を重要視しつつも、そのねらいの違いを明示することが必要である。
- ・「主に愛着、心理面に課題があると見られる児童」、「主に対人面に課題があると見られる児童」については、成果が見られた部分と成果が見られなかった部分があり、やや課題が残る結果となった。長期的な視野での継続した個別の手だてと振り返りや、具体的な手だての検討が課題である。
- ・研究を実施していく中で、児童の実態把握について、運営指導委員の先生方に実施していただいたり、指導をしていただいたりしながら行ってきた。実態把握に基づいた具体的な手だてについても、特別支援教育の視点を踏まえて、多くの指導をいただく中で、各教員が理解し、少しずつ自分たちのこれまでの児童理解を具体的な手だてにつなげていくことができた。これらのことを通して、専門的な視点からの児童の実態把握と、それに基づいた児童理解や具体的な手だてへの知見を得ることができる場やシステムがあることの重要性と必要性を感じた。
- ・「自立活動の内容」への理解を教職員全員が深めることが、大きな課題であった。運営指導委員の先生方のもとで、本校では学びを深めていくことができたが、通常学級の教員の立場で「自立活動」について理解を深めるには、研修を受ける

機会があるか、自主的に学ぶかというところであろう。4年間の研究を通して、通常学級の指導においても、「自立活動」について理解し、その視点を適用していくことは、児童の発達への理解と支援の大きな手だての一つであると考えられる。

「自立活動」について及び、特別支援教育の視点について、現在通常学級での指導を行っている教員がいかにかに学ぶか、今後学んでいくかが大きな課題であると考えられる。

東ときわ台小学校 教育課程表（令和元年度）

	各教科の授業時数										特別の教科道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	特別活動		総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	外国語				特別の時間		
第1学年	306	/	136	/	102	68	68	/	102	/	34	/	/	46	(12) (+12)	862
第2学年	315	/	175	/	105	70	70	/	105	/	35	/	/	47	(12) (+12)	922
第3学年	245	70	175	90	/	60	60	/	105	/	35	35	70	50	(15) (+15)	995
第4学年	245	90	175	105	/	60	60	/	105	/	35	35	70	50	(15) (+15)	1030
第5学年	175	100	175	105	/	50	50	60	90	70	35	/	70	38	(3) (+3)	1018
第6学年	175	105	175	105	/	50	50	55	90	70	35	/	70	38	(3) (+3)	1018
計	1461	365	1011	405	207	358	358	115	597	140	209	70	280	269	(60) (+60)	5845

*「特別の時間」では、特別活動の中で個々の研究対象児童の特性に応じた自立活動の内容の指導を行う。

*特別活動欄の（ ）内の時数については、通常の学級の全ての児童に対する指導ではなく、発達障害等のある児童を含めて、学習上の困難さを有する児童（研究対象児童）の状態に応じ想定される指導時数。

*教科指導において、国語科を中心に研究対象児童の特性に応じた指導目標を設定及び、自立活動の内容の指導をし、一斉指導や分割指導を行う。

学校等の概要

1 学校名、校長名

学校名 トヨノチョウリツヒガシトキワダイショウガッコウ
豊能町立東ときわ台小学校

校長名 クボ ヤスコ
久保 康子

2 所在地、電話番号、FAX番号

〒563-0103 大阪府豊能郡豊能町東ときわ台5丁目17番地

電話 072-738-3451

FAX 072-738-1914

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

(小学校)

学級	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常	13	1	25	1	22	1	20	1	13	1	30	1	123	6
支援	1		0		1		3		2		1		8	2

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	0	1	1	1	7	0	0	1	0	3
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
*1	0	1	*1	18						

令和元年12月1日現在

*…町費職員

研究の概要図

- 社会性や全ての教科学習に共通する基盤となる力を育む活動を行いつつ、特別な内容を付加した「特別の時間」(のびのび)を設定する。『特別の時間「のびのび」』においては、研究対象児童に対しては、『特別の時間「のびのび」』においてそれぞれの課題に応じた個別の指導計画を作成し、自立活動の内容の指導を付加する。
- 研究対象児童に対して、国語科での学習において、自立活動の内容を付加し、指導上特別な配慮や指導目標・指導内容の一部変更、自立活動の内容を付加し、付加する部分を加えた個別の単元指導計画を作成し、指導実施する。

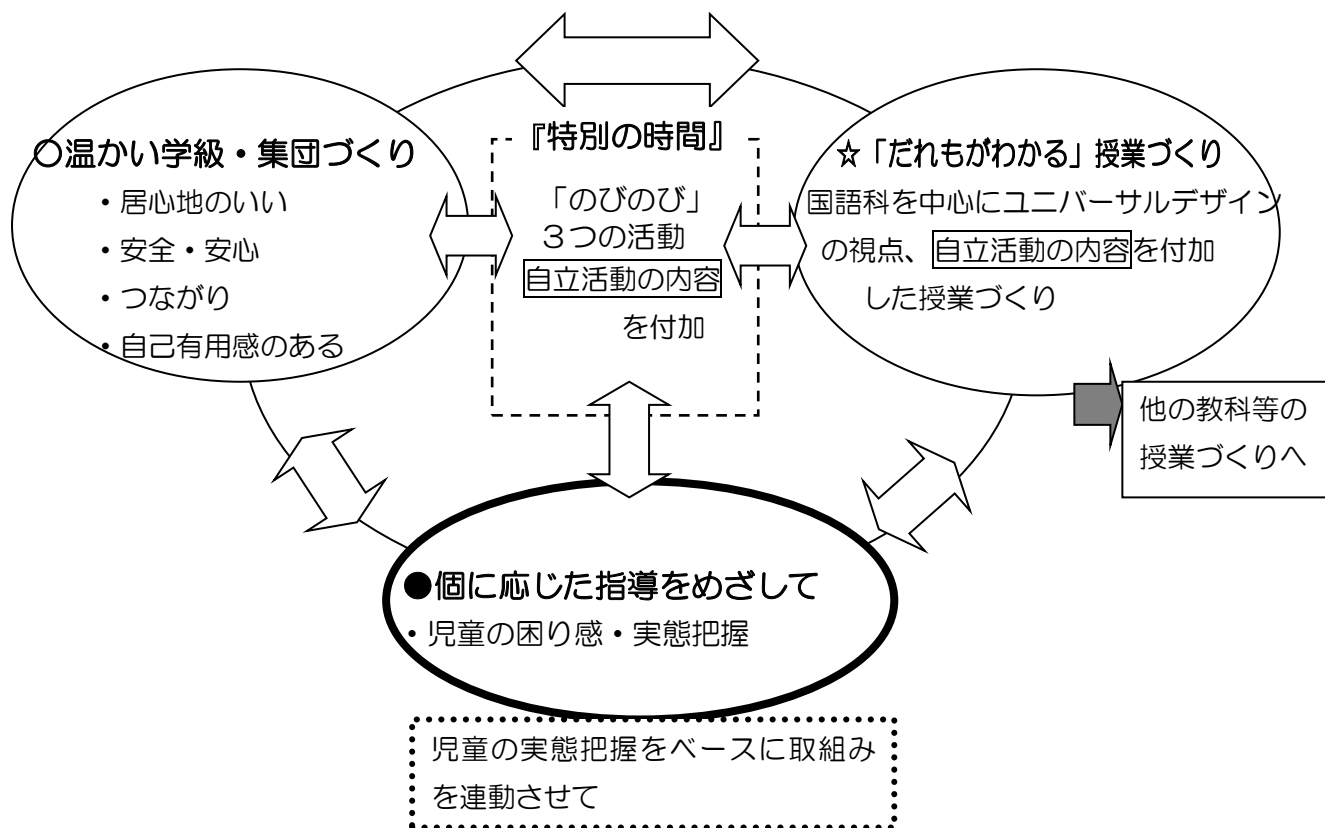
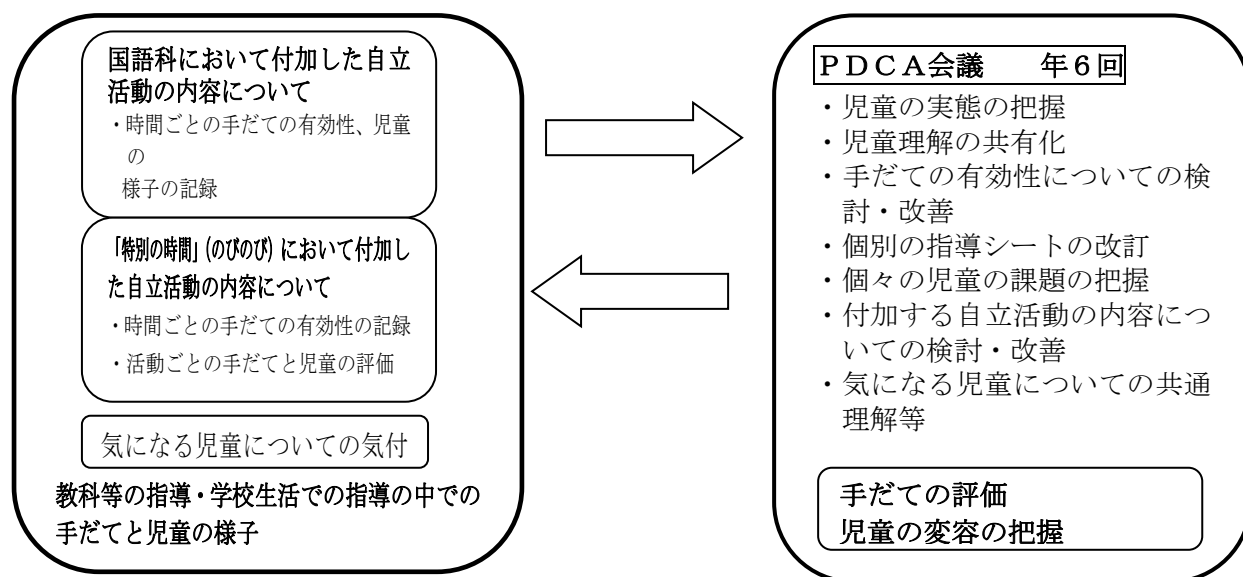


図1. 東ときわ台小学校研究概要図



(図2) 研究対象児童に対する評価システム